



TITLE:

FSERC News No.19

AUTHOR(S):

京都大学フィールド科学教育研究センター

CITATION:

京都大学フィールド科学教育研究センター. FSERC News No.19. FSERC News 2010, 19

ISSUE DATE:

2010-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/151775>

RIGHT:



FSERC News

No. 19

編集・発行：京都大学フィールド科学教育研究センター
住所：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
TEL：075-753-6420 FAX：075-753-6451
URL：http://fserc.kyoto-u.ac.jp

2010年3月

目	次
ニュース.....1	活動の記録.....4
研究ノート・トピックス.....2	フィールド散歩.....4
教育ノート.....3	

ニュース

第6回時計台対話集会「木文化創出～森里海連環学がひらく未来社会」

海城陸域統合管理学研究部門 佐藤 真行

時計台対話集会も今回で6度目を数えました。時計台対話集会は、フィールド研の絶え間ない教育・研究の積み重ねを、一年に一度市民の皆様にご覧いただき、また、市民の皆様へのフィールド研に対する意見や期待を受け止めることによって、今後の進むべき道を磐石のものとするための貴重な場であり、フィールド研の重要な恒例行事の一つと位置付けられております。

今年度は、フィールド研の中核たるプロジェクト、「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」が本格始動した年でもあることから、集会のテーマを「木文化創出～森里海連環学がひらく未来社会」と題し、時計台百周年記念ホールで開催されました。開催日となった2009年12月19日（土）は、厳しい寒さに見舞われたにもかかわらず、熱心な市民のみならず、凛々とした集いとなりました。

本集会は、白山義久フィールド研センター長と江崎信芳京大理事・副学長の挨拶で開会しました。フィールド研の益田玲雨准教授の司会進行にしがた、最初に、国連大学高等研究所のいしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長のあん・まくだなと先生より「森里海をつなぐ木文化社会」と題するご講演をいただきました。まくだなと先生の抽んでた感性で捉えられた日本社会と木文化との結びつきは、深い思い入れのこもった言葉で語られ、市民の皆様へ心へ響きました。もう一つの講演は、建築家の平沼孝啓先生による「森の未来のために建築ができること」でした。森を大切に作る建築、そして木文化を育む人間社会について、実際に国内外を問わず建築設計に携わっているご経験に基づきながら、具体的に、そして未来への希望に溢れた展望が描かれました。

両先生の講演の後に予定されているパネルディスカッションに先駆け、フィールド研の「木文化プロジェクト」について、長谷川尚史准教授と吉岡崇仁教授から、それぞれ、仁淀川と由良川における取り組みが紹介されました。それを踏まえて、まくだなと先生・平沼先生を交え、フィールド研の柴田昌三教授による進行でパネル討論が展開されました。まくだなと先生の斬新な指摘や、平沼先生の実地に基づく意



写真1 会場との対話

見、それらに対するリプライなど充実した議論となりました。

クライマックスは、「会場との対話」で訪れました。例年通り、登壇者が並び、アウトドアライターの天野礼子さんが指揮をとるかたちで進行されました。非常にエキサイティングな議論が、会場の参加者も巻き込んで繰り広げられました。率直で熱い意見があちこちから飛び出し、準備していた1時間はすぐに過ぎてしまいました。話し足りない方々も多くいらしゃったようにも伺えましたが、冬の寒さを吹き飛ばし、手に汗握る盛り上がりとなりました。

こうして4時間にわたって開かれた今年の対話集会は、フィールド研の山下洋教授の挨拶で締めくくられました。今回の対話集会では、これまで以上に率直な意見が開陳され、今後のますますの発展に向けて非常に重要な示唆に溢れておりました。本集会から学ぶことは多く、いただいた賞賛と叱咤を謹んで受け止めて、これからに活かしていこうと考えております。

本集会には、年の瀬も迫りお忙しいなかにもかかわらず200名近い方々にお集まりいただきました。講演、登壇いただいた先生方、運営にご協力いただいた方々、そして何よりも、最後まで熱心に参加していただいた市民の皆様に、心より御礼申し上げます。

研究ノート・トピックス

平成21年度における受賞・表彰

(編集部)

フィールド研の教職員、またその指導を受けてフィールド研究に励む大学院生らが、今年度も多数、学会賞等を受賞しました。ここに今年度の受賞実績をご報告いたします。

平成21年度受賞者一覧

受賞者名	受賞論文等のタイトル	受賞内容	学会・大会及び部門
益田玲爾・山下 洋・松山倫也	マアジ稚魚はクラゲを捕食者回避のためおよび餌のコレクターとして利用する	日本水産学会論文賞受賞	日本水産学会
向井宏	—	H21年「みどりの日」自然環境 功労者環境大臣表彰	調査・学術研究部門
藤井弘明	—	第11回森林管理技術賞	平成21年度全国大学 演習林協議会
谷尾陽一・大手信人・藤本将光・ 吉岡崇仁	二つの森林流域における渓流内 での栄養塩の取り込み	優秀ポスター賞	日本陸水学会第74回大会
陳 炳善	生理生態学的特性を基礎とした 宮古湾におけるクロソイの種苗 生産と放流技術に関する研究	岩手県知事賞	平成21年度岩手県 三陸海域研究論文集
福西悠一・益田玲爾・ Dominique Robert・山下 洋	マダイとクロダイにおける天然 稚魚と飼育稚魚のUV-B耐性 の比較	優秀口頭発表賞	第33回国際仔稚魚学会
鈴木啓太・中山耕至・田中 克	有明海流入河川の低塩分汽水域 における浮遊性カイアシ類優占 種の水平分布－特産種と非特産 種の比較－	学生優秀発表賞	日本プランクトン学会
高橋宏司・益田玲爾・山下 洋	海産魚マアジの学習能力の個体 発生に伴う変化	優秀発表賞（ポスター発表）	日本動物心理学会 第69回大会
宮島悠子・益田玲爾・山下 洋	エチゼンクラゲに対するウマツラ ハギの捕食圧の推定	ベストプレゼンテーション賞	平成21年度日本水産学会 中国・四国支部大会
白澤紘明・大塚和美・ 長谷川尚史	植栽作業工程および初期育林経 費の推算	学生優秀発表賞	森林利用学会 第16回 学術研究発表会
秋山 諭・上野正博・山下 洋	由良川河口域におけるニホンハ マアミの行動日周性	優秀発表賞	平成21年度日本水産学 会近畿支部後期例会

「暖地性積雪地域における冬の自然環境（実習）」

森林環境情報学分野 中島 皇

この実習は、全学共通科目後期集中講義として毎年2月の前半に3泊4日の日程で、芦生研究林にて行っている。テーマは「暖地性の積雪（山間）地域における冬の自然環境を体感する。雪氷調査法（入門）を習得し、水が態を変えた雪や氷について理解を深めその影響を考究する。」（シラバスより）。

今年度は芦生の積雪が非常に少ない。1月から気象レーダーで見ているが、雪雲は完全に芦生を避けて通っていた。湖北の東側や敦賀地方は雪で困っているのに。参加者は8名（男4、女4）（学部：文1、法1、教1、理2、農2、総人1）であった。実習は1月後半の説明会から始まる。15人前の食事を準備することに面喰らっているが、前日までにはどうにか準備出来た。例年なら雪に不慣れな学生諸君の歩行訓練、宿舎周辺の積雪状況を通しての自然観察で始まるが、

なんと積雪は0cm。プログラムはかなりの変更を余儀なくされた。それでも夕食を作り始める頃には、待望の雪が本格的に降り出した。翌朝は約20cmの積雪。皆、ワクワクした顔で山へ向かう。昨日と風景が一変した白い世界に驚き、時に吹雪いたり、霰が降ったりの厳しさも体感した。霰は夜も降り続き、3日目には積雪40cm。技術職員の協力も得て、標高の高い所で何とか積雪断面調査もこなした。食事メニューの作成から食材の買い出し・調理・後片づけまでをすべて自分たちで行うことや水道の管理（凍結予防）について会得するのがこの実習の特徴である。また、TA(Teaching Assistant)である大学院生諸君による食材量のチェック、野外活動時におけるサポートやTA自身の研究紹介等はこの実習に欠かせない重要な要素である。参加者は雪のほとんどない京都とは全く異なった風景と「生活の雪や氷」を実感して、心地よい疲れと共に京都へ戻って行ったことだろう。



実習の説明



実習中の学生達

新刊書『環境意識調査法—環境シナリオと人びとの選好』

森林資源管理学分野 吉岡 崇仁

フィールド研の上賀茂試験地に隣接する人間文化研究機構の総合地球環境学研究所が実施した研究プロジェクト「流域環境の質と環境意識の関係解明」（環境意識プロジェクト）には、フィールド研の研究者・院生、和歌山研究林のスタッフなどが多数参画し、2009年の3月に終了しました。このたび、研究成果をとりまとめた書籍『環境意識調査法—環境シナリオと人びとの選好』（同プロジェクト監修、吉岡編）が、勁草書房より発行されましたのでご紹介します。

本書の構成は次のようになっています。

- 第1章 環境意識を理解する
- 第2章 環境意識調査における調査対象および調査方法の設定
- 第3章 人びとの環境への関心をさぐる
- 第4章 環境変動を予測しシナリオ群を作成する
- 第5章 シナリオを使って人びとの環境意識を解きほぐす
- 第6章 住民会議で環境の将来像をデザインする
- 第7章 シナリオを用いた環境意識調査法を環境施策に活かす

本書では、環境シナリオを用いた環境意識調査について、概念的な考察から、シナリオの作成、意識調査の設計と調査結果の解析などそれぞれの段階に分けて実際の調査の事例とともに解説されています。環境アセスメントに不可欠な住民参加を実現するための取り組みにも役立つことを目指しています。



活動の記録（2009年11月～2010年2月）

○全学共通科目の実施

暖地性積雪地域における冬の自然環境（2月5日～8日）
北海道東部の厳冬の自然環境（2月23日～3月1日）

○シンポジウム・公開講座等

日本財団助成 別寒辺牛川地域連携講座
「森と海をつなぐ川の環境をどう守るか」（11月21日）
第6回時計台対話集会
「木文化創出～森里海連環学がひらく未来社会」（12月19日）
日本財団助成 国際シンポジウム
「International Symposium on Integrated Coastal Management
for Marine Biodiversity in Asia」（1月14日～15日）

各施設の取り組み

○北海道研究林

平成21年度ジュニアリーダー養成講座「しべチャアドベンチャースクール」第4講座（ネイチャースクール）（11月7日～8日）
平成21年度「しべチャアドベンチャースクール」第5講座（冬の野外学習）（1月30日～31日）

○芦生研究林

美山町環境保全対策協議会研修「森林における環境変化の認識」（11月5日）
JICA 支援事業 平成21年度集団研修「森林環境・資源研究」コース（11月11日）

○和歌山研究林

ウッズサイエンス（毎月）
総合的な学習の時間「森を守ろう」（11月5日）

○上賀茂試験地

2009年度上賀茂試験地秋の自然観察会（11月14日）

○紀伊大島実験所

古座川合同調査（毎月）

○瀬戸臨海実験所

冬休み水族館解説ツアー
「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー／バックヤードツアー」（12月26日～1月7日）

フィールド散歩

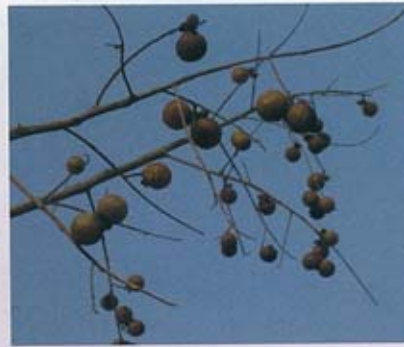
— 秋から冬にかけて各施設及びその周辺の様子をご紹介 —



スイセン（北白川）



ツクバネガキの果実（上賀茂）



ナンキンハゼの実（徳山）



土場に積まれた丸太とグラップル（和歌山）



ミヤマカケス（北海道・標茶）